

河原畑 祐二先生の事

先生のご逝去を心よりお悔やみ申し上げます。

先生との出会いは、3年前妻と結婚した直後の攻玉社 PTA 合唱団のコンサートの時でした。この合唱団の伴奏ピアニストであった私の妻の紹介でした。にこやかに色々お話ししてくださり、「気さくな先生」という印象でした。合唱などというものかどんなものか全然知らない私には、攻玉社の合唱はただ退屈なだけのものでした。

昨年の攻玉社のコンサートで再度お目にかかりました。このときは鉄道談義で短い時間でしたが盛り上がりました。しかし、合唱はやはり退屈なものでした。先生はただ手を振って指揮をなさっている、合唱団は苦しうにその指揮にこたえようとしている、でも私にはその歌の喜びも、悲しみも伝わってこない。この合唱団は一体何なんだ。指揮者は合唱団に何を要求し、合唱団はなにを観客に伝えようとしているのか、はなはだ疑問でした。このことで、門外漢の私は1年間悩みました。

そして、今年、平成28年9月18日攻玉社コンサート。私にとっては3回目のその日です。

それまでに、妻より先生の様態については、大分痩せられたこと、歩行時に息切れをしていらっしゃること等を聞いておりましたが、先生とお会いして少しびっくりしました。椅子に座っていらっしゃっても苦しうなご様子で、歩行時には杖をついて歩いていらっしゃる状態でした。この時の会話は、「先生、お元気ですか？」先生は手を横に振っていらっしゃいました。その後、先生は何を思われたか、「よくここまで奥さんを教育しましたね。」と言われました。私は苦笑いをせざるを得ませんでした。実は、もしかしたら、教育されたのは私の方かもしれないなと思ったものですから、、、、。開演前の会場でのやり取りでしたが、この後、少し団員の方々が発声をしていると、先生は大きな声で檄を飛ばしていらっしゃいました。その声を聞いてまだまだお元気ではないかと思ったくらいです。

さて演奏が始まりましたが、やはりこの合唱団のよさが私にはよくわかりませんでした。が、演奏後の帰りの道すがら、妻と話していて、先生は、攻玉社の合唱団の持っている実力より高いレベルを要求し、雑念を祓って全身全霊で歌うことを要求しているのではないかと、楽しいとか、悲しいとかを越えた、各団員が、魂の底から歌う、「神に捧げるが如くに歌う」というようなことを求めているのではないかと、その魂の底からのピュアーな歌声を観客に聞かせることを意図していたのではないかと思いました。このことに気が付いた時（我流ではありますが、、）、遅ればせながら感動いたしました。クラシック音楽に触れるようになって3年でこのような合唱に出会えたことにも感動しました。河原畑流の音楽哲学の一端に触れた思いがいたしました。この先生は音楽の世界でやりたいことがいっぱいあり、また門外漢である私でも音楽の世界でやっていただきたいことがいっぱいあるように思え、死んでいる暇などないなと思っていましたが、10月3日の訃報に接し残念でなりません。クラシック音楽の深遠さの一端を河原畑先生により感じさせていただけたことはわたしの大きな精神的財産であると思っております。私も60台半ばを過ぎ、まだエネルギーが残っておれば残りの私の人生の糧にさせていただきたいと思っております。最後に河原畑 祐二先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成28年10月22日

瀬戸 哲郎 記